

腹話術と信仰成長（4）

—キリスト教専門用語の多用—

「しかし、その方、すなわち真理の御霊が来ると、あなたがたをすべての真理に導いてくださいます。」（ヨハネの福音書 16 章 13 節）

ゴスペル腹話術師の皆さんは、自分の台本の中で、どれほど“キリスト教専門用語”が使われているかについて、意識したことがありますか。たかだか 10分～15分ほどの長さの話の中で、案外、たくさんのことばが使われているのではないのでしょうか。

私が、ドラマ腹話術を始めた頃（今から 15 年ほど前）、VIP インターナショナルというグループ（ビジネスマン伝道）から招かれて、レストランで奉仕したことがあります。その時、主催者側からあらかじめ釘を刺されたのは「なるべくキリスト教専門用語を使わないでください」ということでした。そう言われたのは初めてだったので、私はハタと立ち止まりました。そして、あらためて自分の台本をチェックしてみたのです。すると、「神」「罪」「救い」「永遠のいのち」など、たくさんのことばが並んでいるのに気が付きました。そこで、これらの言葉を使わないで、その内容をノンクリスチャンにもわかりやすい表現にしたらどうなるのか・・・ということを考え、ずいぶん頭を悩ましたことでした。

私たちクリスチャンは、当然ながら信仰をもつ前はノンクリスチャンであったわけですが、信仰生活が長くなればなるほど、クリスチャン同士で交わることが多くなり、その中で、無意識にもキリスト教専門用語を使ってしまうのではないのでしょうか。その延長で、いざ腹話術で伝道しようと「聖書台本」を書く時、すっかり使い慣れたことばを並べてしまい、むしろそうしなければメッセージにならないとか、使っているから福音を語ったのだ、というような自己満足的錯覚を起こしてしまうのです。ところが、そのような台本は、ノンクリ

スチャンにとっては、ちんぷんかんぷんで、全くもって逆効果なのです。

それでは、どうしたら、ノンクリスチャンにもわかりやすい台本を書くことができるのでしょうか。いくつか思いつくままに、ポイントをあげてみたいと思います。

(1) ひとつの台本の中で、「神」「罪」「救い」などの専門用語を多用することは、絶対に避けましょう。どうしても使わないと話が進まない場合は、ひとつかふたつに絞り、そうしたら、必ずその言葉の意味を、例話などでかみくだいて説明することです。たとえば、「神」なら、聖書の神は観客がもっている神概念とどう違うかを具体的に説明する。「罪」なら、罪とは、一般的に考える罪の概念とどう違うかを例話で説明する・・・などです。

(2) ひとつの台本で、救いについてすべてを説明しようとする誘惑に勝利しなければなりません。“お子様ランチ”のように、何から何まで少しずつそろって、最後に日の丸(十字架の旗)を立てないと気が済まないような話は、観客にとっては、退屈で、全く興味を持つことができないでしょう。原則として、ひとつの話にはひとつのテーマ(真理)で十分です。台本を書く前に、この話で何を伝えたいのか、一行で書きだす練習をしましょう。

(3) そもそも、聖書の救いの教理を並べる台本をやめて、もっと身近な内容から、神の属性や、信仰の力などを紹介するような台本を作ること心掛けてみてください。そのためには、自分の体験した救いの証しや信仰生活の証しなどを盛り込んだ話を書くといいでしょう。証しというものは、私たちが想像する以上に、観客の興味を引き、神が活着ていることを伝える力があります。

(4) 台本を書く前に、日頃から、ノンクリスチャンの家族や友人の言動から、彼らの人生に対する疑問や悩み、興味のあることなど、情報収集しておくことが大切です。児童伝道であれば、教会に来ていない子どもたちがどんな生活をしているか、何を考えているか、どんなことが流行しているかなど、できる限り知っていく努力をしてみましょう。そうすると、どんな例話がピンとくるかなどのアイデアが湧いてくるものです。

以上、幾つか留意点を上げましたが、もちろん、みことばは聖霊によらなくては理解することはできません。それでも、自分が



何を語ったかではなく、相手に何が伝わったかに心を向けたいもの